

地 域の子育て支援事業事例集

365
さん・ろく・ご

日本赤十字社は**365日**
地域の子育てを応援
しています。



目次

1 地域の子育て支援事業 児童福祉施設	3	
● 「里親研修で触れ合う」	秋田赤十字乳児院	4
評価コメント	秋田大学医学部助教授 米山 奈奈子	7
● 「日本語教室でママの仲間づくり」	松本赤十字乳児院	8
評価コメント	松本短期大学講師 竹前 健治	11
● 「食育で家庭の絆育成」	松江赤十字乳児院	12
評価コメント	島根県健康福祉部青少年家庭課 少子化対策推進室長 長岡 隆	15
● 「ふれあい遠足で地域交流」	徳島赤十字乳児院	16
評価コメント	社会福祉法人 小松島市社会福祉協議会 川田 直美	19
● 「保育園であかちゃんのひろば」	武蔵野赤十字保育園	20
評価コメント	武蔵野市保育課長 竹山 正裕	23
● 「雪体験旅行で社会経験育成」	赤十字子供の家	24
評価コメント	武蔵野市子育てSOS支援センター長 吉川 良子	27
● 「野球で交流」	青森県立はまなす医療療育センター	28
評価コメント	青森県立八戸第一養護学校 前校長 佐藤 学	31
● 児童福祉施設の子育て支援事業について	日本赤十字広島看護大学教授 飯村 富子	32
2 地域の子育て支援事業 支部	33	
● 「託児付きで幼児安全法講習」	日本赤十字社 北海道支部	34
座談会	「地域で連携して行う子育て支援事業」	37
● 「子育て支援講座で幼児安全法」	日本赤十字社 群馬県支部	42
評価コメント	群馬県生涯学習センター 学習振興グループ 指導主事 角田 明大	45
● 「親子で防災教室」	日本赤十字社 埼玉県支部	46
評価コメント	鴻巣市役所 福祉部福祉課長 草野 照子	49
● 「小児科外来で「キッズ講座」」	日本赤十字社 静岡県支部	50
評価コメント	静岡赤十字病院 看護師長 鍋田 きぬこ	53
● 「ボランティア育成で子育て支援」	日本赤十字社 大阪府支部	54
評価コメント	大阪総合保育大学 教授 大方 美香	57
● 「相談室でこころの健康」	日本赤十字社 大阪府支部	58
● 「1日講座で子育て支援」	日本赤十字社 大分県支部	60
座談会	「赤十字の特色を活かした子育て支援について」	63
● 各支部の子育て支援事業について	日本赤十字広島看護大学教授 飯村 富子	67
3 日本赤十字社が行う子育て支援事業への提言	日本赤十字広島看護大学教授 飯村 富子	68
4 地域の子育て支援事業一覧	69	
● 児童福祉施設		
● 支部		
5 [資料編] 幼児安全法施設一覧 等	76	



はじめに

近年、社会構造の変化、核家族化が進む中で、家庭的養育機能は、大きく変化し、家庭の子育て機能の低下、親の育児不安やストレスが顕在化してきています。また、子育て中の親の6割が育児に不安を感じ、そのうちの2割が「子どもを虐待してしまうのではないか」と思っているといわれています。

育児不安や虐待を予防するには、そうした親たちに寄り添い、育児に悩んだ時に地域で相談のれる相手がいることや、両親の就業状態を問わず各家庭に対する子育て支援や育児不安やストレスを解消するための情報交換の場の提供など、地域住民の協力による支援が必要です。

また、様々な事情により施設で生活している子どもたちにとっ

ても、地域の人々と過ごした時間や、見守られながら育ったという記憶は、忘れられないものになるはずです。

このように、現代社会の子育てには地域を中心とした多くの人々の支援がますます必要となってきました。

本事例集は、日本赤十字社が平成16年度から重点事業として位置付けてきた「地域の子育て支援事業」の中から、地域や関係機関と連携した取り組みや、継続的に実施している特色のある取り組みについて、事業実施までの経緯、工夫などをとりまとめ、事業に対する評価をいただいたものです。子育て事例の内容も、子どもの食育に関わること、子どもの安全に関わる「幼児安全法」、

次世代間交流や心の相談室など、多岐にわたっています。

本事例集は、関心のあるところから、気軽にお読みいただき、赤十字事業を皆様の身近なものとして感じていただきたく、また、子育て支援事業について関心ある方には、事業のヒントとして活用いただければ幸いです

末筆ながら、ご多忙中、原稿の執筆にご協力いただきました関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成19年2月

日本赤十字社

救護・福祉部

事業局

福祉課



— 児童福祉施設 —

秋田赤十字乳児院

松本赤十字乳児院

松江赤十字乳児院

徳島赤十字乳児院

武蔵野赤十字保育園

赤十字子供の家

青森県立はまなす医療療育センター



児童福祉施設の子育て支援事業について

日本赤十字社広島看護大学教授 飯村 富子



事業実施までの経緯

「抱っこや昼食体験」、触れ合う研修会で里親に理解

秋田赤十字乳児院の主催する事業の1つに「里親研修会」があります。里親と乳児院の強いパートナーシップを築くことが、スムーズな里親移行へ繋がることは充分理解していたのですが、現場への負担などを思うと消極的でした。しかし、里子として迎えられた子どもが退所児の約30%を占めることを考えたとき、「里親の理解に向けて今からでも何かできることはないか」と職員の中で検討をはじめました。そして秋田県中央児童相談所、秋田県里親連合会のご指導とご協力を得て、自信を持って里親研修会開催の第二步を踏み出すことができました。

して、子どもとたくさん触れ合ってもらいたいと考えました。職員が見ていただき、里親希望者の抱えている「不安」や「焦り」を少しでも軽減できるきっかけになればと願って臨みました。



事業の内容

「ひよこ組」と「ばんび組」に分かれて食事や散歩を実施

研修会は5部構成で、子どもの発達に応じた「ひよこ組(生後1歳3ヶ月まで)」と「ばんび組(1歳3ヶ月〜退所まで)」に午前、午後とに分け、それぞれ里親希望の方に参加していただきました。第1部は「知り合い、触れ合い」の時間です。ひよこ組では、赤ちゃんの温かさを感じる抱っこや授乳、離乳食の介助体験を実施。ばんび組はベビーカーに乗せたり、子どもたちの手をひいたりして、乳児院近辺の公園や川べりを散策しました。時々手を放そうとする



子には優しく注意を与えたり、また「水たまり」を避けようと抱っこしてあげたりと徐々に距離をつめていきました。第2部は「食体験。みんなでランチ」です。子どもたちといっしょにテーブルを囲み、今日のメニューを食べました。子どもたちの食欲旺盛な様子にびっくりしながらも、つられながら参加者もおかわりする姿が見られました。その後、栄養士による「楽しい食事について」の講話を行いました。おやつを試食やレシポの提供をすると熱心に質問し、「家で作ってみたい」と喜ぶ子どもの顔を思い浮かべるように明るく話していました。

昼休みの時間は参加者同士の積極的な情報交換の場となり、会話が弾んでいました。午後の第3部は「学びの時間」としました。家庭支援専門相談

事業の効果、成果

子どもの良さを実感することが理解への道に

です。また職員の姿を目の当たりにし、乳児院に対する理解や職員へのエールもいただきました。

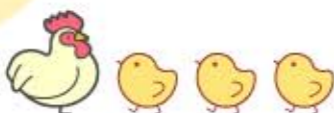
員による「子どもの体調を見るには」といった話に参加者は笑ったり、時には涙ぐんだり、うなずいたりときまざまな反応を見せてくれました。第4部は午前の組みを替えて、再び「触れ合い」の時間を設定しました。第5部は研修を振り返っての意見交換、そして閉会。アンケート調査にも協力していただきました。

昼食メニュー

- ①スパゲッティ(ナポリタン)
②グリーンサラダ
③ほうれん草としいたけ入り卵スープ
④フルーツ(いちご)



秋田赤十字乳児院 初研修会開催
秋田市広面の秋田赤十字乳児院が主催する里親研修会が、同日、同乳児院で行われ、参加者は子供とじかに触れ合うことで、里親についての理解を深めていたと写真。



(秋田さきがけ新聞・2006年5月22日掲載)

事業を行う上での課題点、今後の課題

生活に密着した研修で もっと児童と触れ合えるように

複数回の参加を計画し、子どもとの触れ合いでは、手遊びや絵本の読み聞かせなどを披露することや、子どもたちに人気あるキャラクターの説明や子どものころのつかみどころなど、養育のコツをお話したり、また歯みがきやその介助等、より生活に密着した体験を取り入れていきたいと考えています。

全体の感想、職員に対する意見・要望 ~アンケートから

- 離乳食のやり方が下手で食べてもらえず残念。
○もっと時間があっても良い。
○生みの親に感謝。
○初対面でありながら子どもが胸に飛び込んで来て感激した。
○不安だったが進んでいるうち子どものすばらしさを実感した。
○子どもが可愛いし、また来たい。
○触れ合えて良かった。
○職員のがんばりに心を打たれた。
○職員の熱心さに感動した。
○ひとりひとりへの気配りに感心した。

普段の私たちの姿を見ていただくことの研修会でもありましたが、参加者にどのような見られていたのかと考えると、学ぶことが多い一日でした。「未来を担う子どもたちのため」をモットーに、子育てをする仲間という連帯感をはぐくみ研修会の内容も身近なところから課題点までを取り入れ、会を重ねていきたいと思えます。



事業実施のスケジュールと当日の流れ
事前アンケート調査。約半年をかけて計画を練る

年度	内容
平成17年	8月 研修会開催を決定 9月 里親研修会に対する意見要望を聞くため秋田県里親連合会会員100名にアンケート調査実施 10月 アンケート調査票の回収(回収率42.6%)
平成18年	1月 委員会において調査の報告 1月10日 連合会事務局へ研修概要書持参 1月27日 連合会事務局へ最終案を持参 2月15日 最終案を親子育て支援課中央児童相談所へ持参 3月13日 平成18年度予算審議の日赤評議員会へ報告、承認を得る 5月1日 研修担当は当日スケジュールのチェックと受付、会計などについて打合せ 10日 雨天の場合のメニュー「ぬり絵用こいのぼり」を作成 当日 みんなでランチのテーブルBGM、生花と花びんの準備 調理室前に「食育」や「おやつ」のメニューの資料提示

当日のタイムスケジュール

9:30~9:45	受付
9:45~10:00	開調式 オリエンテーション 施設内見学
10:00~11:15	<くひよ組>抱っこや触れ合い、離乳食、介助体験、一部近隣の散歩 <くぼんび組>触れ合い、抱っこ、手をつないだり、ベビーカーで近隣を散策
11:15~12:00	食体験「みんなでランチ」
12:00~12:15	栄養士による食育講話「楽しい食事について」

事業実施の際の注意事項

● 乳児との触れ合いは、充分注意して、事故のないように

12:15~13:00	休憩(受講者の交流を兼ねる)
13:00~14:00	家庭支援専門相談員による健康講話「子どもの体調を見るには」
14:00~15:00	午前のメンバーを入れ替えて触れ合い体験
15:00~15:30	意見交換 アンケート調査
15:30~14:00	閉調式

- 受講中の事故、怪我の保障を考慮し、参加者には傷害保険の任意加入をお願いしています。
- 感染予防のため、手洗いの励行、専用エプロンの着用、軽装での参加、ネックレスやピン止め類の禁止、ポケットに小物類は入れないようお願いして実施。
- 子どもの発育によって子どもへの対応が違います。気軽に職員に質問しながら楽しい時間を過ごして下さい。
- 見聞きしたことの情報には守秘義務があります。

DATA

- 事業の頻度 1年/2回
- 参加人数 20名

施設紹介

● 乳児院には名所旧跡と共に、大学や病院も近接

JR秋田駅より車で約10分。途中久保田城址の千秋公園など歴史ある名所をみることが出来る一方、大学、病院、商店でにぎわう地域でもあります。東方には男の祭りである有名な太平山三吉神社があり、毎年1月には梵天を激しく振りかざす勇壮な様を見に大勢の人が集まり、町は活気にあふれます。子どもたちが歩いていける距離に、東部公民館とランコや大型滑り台がある開放的な公園、運動広場などがあります。広場に隣接する「こぼと保育園」の園児と子どもたちが一緒に遊んだり、職員同士も声を掛け合って情報交換の場とし合うなど養育環境も最適です。



● 開かれた乳児院目指して、広報活動も積極的に

現在、当乳児院では、まだまだある乳児院に関する誤解や偏見を取り除く為、ボランティア、保育実習、体験学習の受け入れや広報活動を積極的に行うよう心がけています。また、家庭で子育てをしているお母さんへの支援として、院内開放事業「愛あいクラブ」や「フレマサロン」への参加を呼びかけ「開かれた乳児院・身近な乳児院」を目指した活動も行っています。当院の継続事業である夜間延長デイケア、ショートステイ、病後児保育、電話相談などは、社会ニーズを取り込んだ事業です。今後さらに乳児院の持つ機能とマンパワーを活用し、ニーズを先取りした事業展開のできる乳児院へと変貌しなければと考えられています。

里親研修会開催への期待

評価コメント



秋田県は婚姻率・出生率ともに全国一低い県ですが、何らかの事情によって乳児院や児童養護施設へ措置される子どもの数は、後を絶ちません。秋田赤十字乳児院は、県内唯一の乳児院で、大変ユニークな子育て支援事業を行っています。それが里親研修会です。乳児院退所児の約30%が里親の下で育てられているにもかかわらず、里親希望登録者が乳児院との接触経験が少ない現状を鑑み、早期からの子育て支援をすすめるものです。

研修会は、研修生が乳幼児とふれあい子育てを楽しめることを目的とし、5部構成のプログラムからなっています。乳幼児の生育環境では、無条件の安心感や自己肯定感を与えられることが最重要課題となるので里親がそうした安心感を自身の中に育み、迎えるべき里子に惜しみなく与えることができるようになることがゴールとなるのではないのでしょうか。子育ては、楽しいことばかりではありません。

秋田大学医学部助教授 米山 奈奈子

せん。自分の子どもでさえ、親となれば戸惑い悩むことは少なくありませんし、それが里子で、しかも期限付きの子育てであるなら、どこまでどうすることが子どものためになるのか、実の親ではないことで子どもに不利益を与えないか、あるいは子どものためと言っても本当に子どものためになるのか、私も里親になれば悩むに違いなと思います。そうした親への支援事業の重要性が、今後さらに高まるのではないのでしょうか。

里子の中には、実親からの虐待を受けてきた子どももいます。子どもたちは、どんな環境であつても、安全に、そして健康で安心して育つ権利を持っています。秋田赤十字乳児院の取り組みは、少ない子どもを大切に育てていくための、加えて、子育てをする大人を育てるための先駆的な取り組みです。研修会は今年始まったばかりですが、今後の展開に期待したいと考えています。



DATA

社会福祉施設 秋田赤十字乳児院

〒010-0041 秋田県秋田市広面字釣瓶町100-3
TEL: 018-884-1760 FAX: 018-884-1762
相談電話: 018-884-1761
URL: http://www.akita.jrc.or.jp/nyujiin

- 施設開設年月... 昭和24年8月
- 定員... 30名
- 職員数... 26名(平成18年4月1日現在)

MAP



事業実施までの経緯

外国人ママの子育て支援の場にもなる「日本語教室」

ある時外国人の母親から「子どもが保育園から持ち帰ったお便りが、日本語であったため理解できず、翌日必要だった物を子どもに持たせてやれずに悲しい思いをさせてしまった」との話が聞きました。

母親は日本語の勉強をしたいという強い希望はありましたが、母子家庭で日本語を勉強するゆとりがない状況でした。そこで、母親が子どもに面会にきたときに日本語の勉強ができないかと思いい、外国人の母親を対象に、日赤ファミリーの会「日本語教室」を平成7年度より開設しました。教室には、日本語が全然分らない受講生、日常会話は出来るがひらがなの読み書きの出来ない受講生、日常会話・ひらがなは分かるが漢字の読み書きの出来ない受講生がいます。受講者のレ

ベルにあった教本を使い、日常生活の中で必要なことから勉強をしています。自分の出身国のことを日本語で話している中で日本との習慣の違いを理解し、生活に

役立てていただけるといいと思います。教室は、特に来日後間もないことなどにより生活・言語習慣・価値観の相違から孤立しがちで、育児不安に陥りがちな国際結婚による母親同士の交流の場ともなっています。また仲間づくりとともに、育児に関する情報提供や育児不安に対する支援の場と



もいえます。

今では、乳児院に入所している子どもの親だけでなく、その兄弟、姉妹の高校生も参加しています。



事業の内容

日本の伝統行事や料理も学習

この事業は、毎週火曜日午前10時から12時までの2時間を使って行われています。開設当初は日本語の学習を主としながらも、月1回日本の唱歌を取り入れた学習や、シニアボランティアの協力をいただき、ひなまつり・子どもの日・七夕まつりなど日本の伝統行事の食事づくりと食事を楽しみながらの会話を取り入れた学習もしていました。現在では、受講者の希望により日本語のみの学習をしています。

講師は日本語教師の資格を持ったボランティアがあたり、生活上の相談にも乗っています。受講生の子どもたち(乳幼児)は、地域の赤十字奉仕団が託児にあたっています。受講生の母親からは、ボランティアの赤十字奉仕団員との会話を通して子どもが日本語を覚えたり、社会性が



身に付くと喜ばれています。クリスマス会や出産祝いパーティーの開催、日本の伝統料理の講習会、母国の料理を持ち寄る会食など、楽しく勉強しています。

事業の効果、成果

受講者の多くが地域に溶け込み活躍

開設当初に受講していた母親が、夫の病死後勤務していたレストランの責任者になったと、喜んで話してくれました。現在、受講者の多くは流暢な話し方が出来るようになり商店の店員やレジ係として地域に自ら溶け込み頑張っています。



また、日本語に自信がつき子どもが通っている学校の保護者との付き合いが出来るようになり、学校の行事に参加出来るようになったり、日本語検定一級の資格を取得し母国の講師及び翻訳の仕事をして活躍しています。

事業を行う上での課題点、今後の課題

長く、有効な支援を続けるために、地域新聞でPR

日本語をある程度マスターした受講生が就職し、短期間で学習を止めてしまうケースもあります。公共機関を利用している受講生の中には、天候や家庭の事情により継続的に出席できない人もいます。その結果、ボランティアの依頼も定期的に同じ人数でお願ひできません。

車の免許がない受講生に対しては、継続的に受講できるようにスタッフが送迎をしています。今後、地域の新聞などを通して事業のPRをしていきたいと考えています。



事業実施のスケジュールと当日の流れ

- ボランティア団体のメンバーに講師の依頼
- 松本市の住民課(外国人登録)及び各支所などにチラシの作成・配布
- 参加者の受付
- 講師との打合せ
- 参加者・講師の名簿の作成
- 奉仕団への託児を依頼

日本語教師はボランティアグループに依頼

当日のタイムスケジュール

- 9:30 会場の設定
- 9:50 受付
- 10:00 開始
- 授業の流れにより教材の準備
- 12:00 終了
- 12:10 講師と次回の打合せ

- DATA
- 事業の頻度……………毎週/1回
 - 参加人数……………5~10名
 - 活動の費用、財源……………厚生労働省雇用均等・児童家庭局からの補助金で実施している



事業実施の際の注意事項

楽しく、明るい雰囲気づくりと、分かり易い指導を演出

- 受講者はタイプライピン・中国ほか様々な国から来ていることを考え、各々のレベルに応じた指導と楽しく学習できる明るい雰囲気づくりを心がける。
- 託児をお願いしている赤十字奉仕団の方には、子どもの「安全第二」と正しい日本語での語りかけを依頼。
- ボランティアの方には万一時を想定し保険の加入をお願いする。



施設紹介

桜の名所や文化施設に隣接する乳児院

松本赤十字乳児院は、長野県のある松本市北部の浅間方面に位置し、隣接する美須々公園は松本市の桜の名所となっています。また近隣には松本文化会館、総合体育館、長野県護国神社、信州大学病院などの施設が揃っています。

当院では子育て支援事業として「育児テレホン相談」「外国人ママの日本語教室」「ショートステイ」「マタニティ教室」などを実施しています。平成12年からは、地域の皆さんに乳児院を理解していただくため「乳児院まつり」を開催。この事業は赤十字奉仕団の協力をいただいています。



不安を抱えた母親たちの気軽な相談場所に

子育て事業の二環として、昭和53年より電話での育児相談をはじめ様々な相談事業を行っています。

最近の傾向として、子育てについての情報は豊富ですが、突発的な問題に直面したとき、自分の考え通りにいかず、不安を覚え過剰な心配をするケースが増えています。核家族化により助言者や協力者がなく、ひとりで悩みを抱えている母親も増えています。

平成4年より行っているマタニティ教室の参加者は、「実家が遠いので頼るのは夫だけ」という方も多く、出産の不安と同時に出産後の心配を口にすることも多いです。こうした母親たちの「子育てに疲れたり、一息入れたいとき気軽に利用できる場所」として活用できる院をめざしています。



地域子育て支援の展開

評価コメント



松本短期大学講師 竹前健治

日本は少子高齢化の波に乗り加速しています。平成17年度の合計特殊出生率が1.25となり、さらに低下しています。

親が養育する子どもの数は少なくなっているにも拘らず、逆に子育ては苦しくなっているというのが現状です。子育て不安を解消し、子育てをしやすいとする支援対策が急がれるところです。

松本赤十字乳児院ではこのような子育て支援事業として、入所してくる乳児に対する支援はもちろんのこと、電話相談や今回主に取り上げる外国人の親を対象とした日本語教室を開催してきて11年程になります。私は松本児童相談所に勤務していた頃からその先導的な取り組みには注目していたものでした。

子どもを育てる親にとっては国籍を問いません。家庭を中心に地域社会の中で生活をしながら育て上げていかねばならないのです。

外国から日本へ移り住んだ人にとっては、コミュニケーションの手段としての言葉の壁は厚いものです。どんな制度のもとで、どんな支援が受けられるのか、どこへ相談にいけないのか不安は増大します。そんな問題への取り組みとしての日本語教室が、看護師や保育士さんに支えられて乳児が日常生活している、ここ松本赤十字乳児院で毎週ごとに行われていることの意義は大きいと思います。ここでは数名の言葉を指導するボランティアの人々の協力のもとに大きな成果をあげてきています。子育てを考えたとき、国籍や年齢、障害にとらわれず、どんな人も子育てしやすい社会が望まれます。子育ては家庭だけでなく地域社会で支えていかなければならないだけに、ここで行われている日本語教室は刮目に値するものと思われれます。



DATA

- 社会福祉施設 松本赤十字乳児院
- 〒390-0312
長野県松本市大字岡田松岡49-2
TEL : 0263-46-4630 FAX : 0263-46-2866
- 施設開設年月……………昭和25年3月
 - 定員……………20名
 - 職員数……………22名(平成18年4月1日現在)



事業実施までの経緯

献立カード配布事業で食育をPR

平成17年7月15日、国民一人の健全な食生活の実現を目指す「食育基本法」が施行され、食育を総合的・計画的に推進することが求められています。当院でも乳幼児の生活の中で大きな割合を占める食の時間を、楽しく、生き生きとしたものにするのが、人間の基礎づくりにとって大切になると考え、平成14年より、赤ちゃんの食育として食を見直し、職種を越えて様々な実践を重ねてきました。その中で今回、乳幼児の食育は家庭生活を通じて実践できることが大切な為、赤ちゃんの食育紹介として、献立カードを作成、そのノウハウを地域に提供していくことにしました。乳幼児を持つ家庭で食育が積極的に実践され、子どもの健全育成はもちろん家族の絆も深める取り組みになればと考えています。



献立カード 内容一覧

大人のメニューからの取り分け離乳食 (初期・中期・後期)
「夏野菜カレー」「寄せ鍋」「ケーキ寿司」

赤ちゃんの食育
「たまご」「ミックスジュース」「ふりかけ」

育児一口メモ
「お家の救急箱に用意しておきたいもの」
「赤ちゃんのおでかけに用意しておきたいもの」
「一度チェックしてあげて？ お家の中には危険がいっぱい」

赤ちゃんの食育って？ ミックスジュース

させてあげて 待ってあげて 一緒に楽しむ

食育は家庭の中で、地域の中で、なげなく営まれている生活の中にあります。五感（触れる、見る、かく、味わう、聞く）を刺激して子ども達に伝えることにより、子ども達の感性が養われます。感性とは気づく心です。子ども達が自分で気づいた時、「そうだね」とって共感することによって、子ども達の目が輝き、そこに成長があるのです。

大人のメニューからつくる離乳食

ケーキ寿司・根菜スープ・梅

※ケーキ寿司は、お家で作るケーキを、お家で作る寿司の具材で巻くだけです。お家で作るケーキは、お家で作るケーキの具材で巻くだけです。お家で作るケーキは、お家で作るケーキの具材で巻くだけです。



* 献立カードは、ホームページで見ることができます。
松江赤十字乳児院 <http://www.mable.ne.jp/mrc-nyuji-in/>
日本赤十字社 <http://www.jrc.or.jp>

事業の内容

父親にも母親にも使いやすい工夫、
家庭の中で実践できる食育を目指す

子育ての中で、離乳食など食事の悩みを抱えている方は、とても大勢います。さらに「食育」の大切さが叫ばれていることから、乳児院としては、地域の方々に育児情報の提供を目的とした、献立カード配布事業を計画しました。カード形式にしたのは、必要な情報を選んでもらえること、コンパクトで台所など気軽に置いて使えること、肩が凝らず読み易いことなどをねらいとしたからです。また乳幼児の食育は、家庭生活の中で実践できるのが大切なことから、「食育コミュニケーション」といった内容も取り入れ、父親も参加でき家族みんなで楽しいひとときを過ごしてもらえようようにしました。一口メモは看護師が担当、カードにして残しておく



便利な内容を選びました。表紙やカットは保育士が担当、栄養士も加わり、チームでカード制作に取り組みました。配布先は、子育て支援センター、市役所窓口、スーパーマーケットなどで、自由に取ってもらえるようにしました。健診時にも配布しました。

事業の効果、成果

使い易く、親しみ易い
家族の絆を深める献立カードに

の絆を深めるお手伝いができた
と思っています。

大人のメニューからつくる離乳食

夏野菜カレー、ヨーグルトサラダ・ゆで卵

※夏野菜カレーは、お家で作るカレーの具材で巻くだけです。お家で作るカレーは、お家で作るカレーの具材で巻くだけです。お家で作るカレーは、お家で作るカレーの具材で巻くだけです。

事業を行う上での課題点、今後の課題

グループの知恵を出し合った
子育て支援事業に育てたい

今回は当院のある松江市内を中心に配布しました。第2段階として鳥根県西部への配布も考えていますが、残り部数も限られていますので、現在配布方法を検討中です。

者、里親）や地域の方々に配布予定の冊子「子育てのコツ」を検討していますが、赤十字グループの乳児院が、それぞれノウハウを交換し、地域限定でない子育て支援ができれば良いのではないかと考えています。

事業実施のスケジュール

チームで制作、季節毎に配布。利用者のニーズを踏まえて

作成までの流れ

- ・「献立カード」研究実践グループ立ち上げ
- ・全スタッフミーティング実施（目的、内容、発行時期、役割分担、カード名など検討）
- ・各担当毎に作業を行う（献立担当、ロケモ担当、表紙・カット担当）企画・調整担当者それぞれが担当者がミーティングを行いながら仕上げていく
- ・印刷、発行、配布



DATA

- 事業の頻度
 - ……季節ごとに年3回発行
 - 表紙1000枚、中のカードを各300枚作成し、自由な組み合わせで利用者が手にとれるように工夫しています
- 活動の費用、財源
 - ……¥133,350
 - 日本赤十字社児童福祉施設機能強化交付金、臨済宗「求法の会」寄付金

月	テーマ
3月	みんなで料理
4月	ミックスジュース(春)
5月	目玉焼き
6月	お魚
7月	夏野菜
8月	ゆで卵
9月	だんご
10月	ミックスジュース(秋)
11月	おいも
12月	冬野菜
1月	パン
2月	ふりかけ

松江赤十字乳児院では、栄養係、養育係、相談係が連携し、毎月テーマを決め、地域の子どもたちといっしょにプチクッキングを楽しんでいます。子どもたちは食材の色や形の変化に驚き、様々な味や香りを体験し、自分で作った料理のでき上がりを、友達といっしょにワクワクしながら待っています。日々の生活の中で、五感を意識して子どもたちと接し、子どもたちの気づきに共感する「させてあげて待つてあげていっしょに楽しむ」ことが、赤ちゃんの食育と考えています。

その他の活動

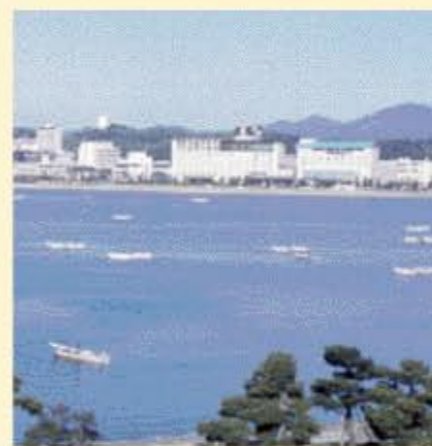
地域の子どもたちとプチクッキング

施設紹介

静かな時間が流れるゆかしい町、松江

当施設がある松江市は、古代出雲の中心地として早くから開けた城下町です。宍道湖、中海、堀川など近在は水に恵まれ、「水の都」とも呼ばれています。昭和26年、京都市、奈良市と並んで国際文化観光都市となりました。夕日に浮かぶ嫁ヶ島で有名な宍道湖は、日本の白の小舟がブルーの湖面に映える様子は宍道湖の風物詩となっています。

昔日の面影を残す木造の松江城や怪談で有名な小泉八雲記念館、神話の国出雲を代表する国宝神魂神社など国を代表する名所旧跡を見ることが出来ます。また、スランドグラスが美しく輝くティファニー庭園美術館や花と鳥の公園松江フオーゲルパークも見所。抹茶と和菓子のおいしい松江は、静かゆつたりと時間の流れる町です。



個々の家庭状況を考慮に入れた子育てサポートを

島根県では、少子高齢化に加え、若者の転出が転入を上回る状況が続いており、地域における子育て機能が低下傾向にあります。また、核家族や共働き家庭の増加は、家庭の養育機能の低下や親の不安感、孤立感、負担感の増大をもたらしています。当院における育児相談、育児サークル、施設開放利用者などの声を聞くと、子育てに関する社会資源の量的な確保に加え、家庭の状況を充分考慮に入れたサポートの必要性を感じます。

昨年当院で実施した松江市内の母親を対象とした一斉調査では、数時間のリフレッシュ預かりの要望が第一位という結果でした。

評価コメント

「やさしい気持ちで子育てを」



現在、島根県では「いつでもどこでも安心して子育てできる環境づくり」を重要施策に掲げ、地域全体で子育てを支える機運醸成や仕組みづくりに積極的に取り組んでいます。

こうした取り組みの二環として、今年7月から「しまね子育て応援パスポート事業」がスタートしました。この事業は、子育て家庭に交付されたパスポート(愛称:「いっころ」)を協賛店などで提示すると、商品や料金の割引をはじめ、親子の触れ合いの場や子どもを育む体験の場の提供など、創意工夫を凝らした様々な子育て支援サービスを協賛する企業、団体が提供する仕組みです。「いっころCOCCOLO」とは、イタリア語で「かわいい子ども」の意味で、次代を担う子どもたちの健やかな成長を願って名付けられました。平成18年10月現在で約1300店舗の協賛をいただっており、今後さらに子育ての支援の輪を拡げていくとしています。近年、少子化が進行する中、その要因は

様々であり、その対策には総合的、一体的な取り組みが必要であることは申すまでもありませんが、先ずもって大切なのは「いっころ」に代表されるように、地域や人々が子育てや子どもたちにやさしい気持ちになれることであると考えています。

このたび、松江赤十字乳児院が取り組まれた献立カードの配布事業は、乳幼児期の食育をテーマに、「子どもと食」の不安や悩みを、楽しく美味しく、そして、お父さんも一緒に家族みんなで実践できる食育コミュニケーションを提案するものです。

「愛されていたことが心の底に残るよう」という想いがいっぱい詰まったこのカードが、まさに家庭版の「いっころ」として、家族の温かな触れ合いの中で子どもたちの心と身体を豊かに満たす一助になるものと大いに期待しています。

最後になりますが、この新たな取り組みが、これまで地域における子育て支援に先導的な役割を果たしてこられた当乳児院の歴史に新たなページとして加えられ、今後ますます発展されますことを祈念申し上げます。

島根県健康福祉部青少年家庭課
少子化対策推進室長 長岡隆

DATA

社会福祉施設 松江赤十字乳児院

〒690-0886 島根県松江市母衣町83-1
TEL: 0852-24-6417 FAX: 0852-24-6417
URL: <http://www.mable.ne.jp/mrc-nyuji-in/>

- 施設開設年月…昭和31年12月
- 定員……………40名
- 職員数……………30名 ※嘱託医を除く
(平成18年4月1日現在)

MAP



事業実施までの経緯

開かれた施設を目指して
遠足で地域の交流を深める

これまで地域に開かれた当院の取り組みとして、育児相談や近隣家庭への呼びかけ、母子参加によるお菓子作りや遊びの体験や乳幼児救急法の指導、夏祭り行事への招待など行ってきました。今回、地域の親子及びボランティアの方々の遠足を通じて、地域の子育て支援を深め、入所児にはその経験を通して社会体験の場を広げることなどを目的に「ふれあい遠足」を実施しました。今までに3回実施し、幅広い世代の方々との多様な出会いや関わりを持つことができ、入所児の能動的な活動を引き出す刺激にもなったと思います。遠足の案内を市の社会福祉協議会に依頼し、応募された地域の親子やボランティアの方々と、当院の子どもたちと職員総勢30〜40人規模で実施しています。



事業の内容

地域の親子と
乳児院の子どもが一緒に歌も

地域の親子と当院の子どもたちは、ボランティアの方々と組みになって行動します。最初は人見知りなどで緊張さ



みですが、バスの中や一緒に散策するうちに次第に慣れてきて笑顔が見られたり甘えたりするようになり、自分の気持ちやして欲しいことを素直に言うことができるようになってきました。バスの中で歌を歌ったり、お話を聞いたり、お弁当と一緒に食べたりして地域の子どもたちと触れ合う機会を多く作っていますが、地域の同年齢の子どもたちの参加が少ないことや、家庭保育児のため子どもたちが集団に慣れておらず、親から離れず、関わりが上手にできない状態もあり、一緒に遊べるような、遊びの工夫や、コミュニケーションの持ち方などを今後考えていかなくてはと思っています。大人たちには食事の状態や遊ばせ方を見てもらい、子どもたちは嫌がらない程度に遊びに参加してもらっている現状です。

事業の効果、成果

共に童心に戻って、
子どもたちの理解を促進

道中のバスの中での意見交換での感想

- 久しぶりに童心に戻って子どもたちと関わりことができ楽しかった
- 心地よい疲れを感じる
- これからいろいろな行事に声をかけてほしい
- 母親からは、他の子どもたちの様子が見えて参考になった



経験豊富な
ボランティアが
積極的に参加

小松島市の社会福祉協議会に登録されているボランティアの方々に依頼。来られた方々は、他にもボランティア活動をされていることもあり、積極的に関わってくれましたが、この事業だけに終わらず、当院で行なっているその他いろいろな行事にも参加協力いただければと思っています。

事業を行う上での問題点、今後の課題

もっと地域からの親子参加を募り、
入所児の理解に役立つ行事に

来ていただいたボランティアの方々の中に障害者へのボランティア活動に対して経験豊富な方や障害者の方が含まれていたため、事前意見交換の場をつくり、子どもたちのマッチングに役立てれば、よりスムーズに活動いただけたのではないかと思います。地域の親子参加が少ないので、

募集方法の検討が課題として残りますが、こういう地域社会の連携の積み重ねが、施設理解と地域への育児支援、ひいては入所児の処遇向上へと繋がって行く事になると思います。これからも積極的に取り組んでいこうと思っています。



「地域ふれあい遠足」へは、毎年、5〜10名のボランティアさんと一緒に参加させていただいております。平日の開催ということもあり、参加するのは、おばあちゃんやおじいちゃんや年代のボランティアさんです。職員みなさんとは勝手の違う雰囲気、子どもたちは最初は緊張した面持ちですが、そこは年の功。子どもたちをやさしく包み込



徳島赤十字乳児院のみなさんには、日頃から本会地域福祉推進事業にご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

特に、ボランティアアサセンター事業では、毎年度開催しております「夏休みボランティア体験講座」での中学生、高校生のボランティア体験の受け入れや、小学生ボランティアとの交流の機会を提供いただき、普段の生活の中で乳幼児と関わることの少ない多感な時期の児童・生徒達にとって、命の尊さや自分自身と周囲との関係性について考える貴重な体験の場となっております。

地域の子育て支援の要として期待

評価コメント

社会福祉法人 小松島市社会福祉協議会
ボランティアコーディネーター 川田直美

「また来年も」と話される方は多いです。乳幼児の施設ということもあり、子どもたちと日常的に触れ合えるボランティアを受け入れることは難しい中で、行事や事業を通して、学生から中高年のボランティアさんと交流を重ねておられることは意義深く、今後は、地域の子育て支援の要としてさらに地域の方との交流を広げていただくことを期待します。本会としても益々連携が深められるよう、協力体制に務めてまいりますのでよろしくご願ひ申し上げます。



DATA

社会福祉施設 徳島赤十字乳児院

〒773-0015
徳島県小松島市中田町新開12-2
TEL : 0885-32-0555 FAX : 0885-32-8822

- 施設開設年月…昭和28年6月
- 定員……………45名
- 職員数……………37名(平成18年4月1日現在)

MAP



当日のタイムスケジュール

13:00	徳島ファミリーランド出発
13:30	徳島赤十字乳児院到着
13:45	解散

当日までの流れ

9:30	行事の1日のタイムスケジュールと出かける子どもたちの特性を説明
10:00	徳島赤十字乳児院出発
10:30	徳島ファミリーランド到着 屋外遊具で遊んだり散策する
12:00	昼食

事業実施のスケジュールと当日の流れ
社会福祉協議会に協力を依頼



DATA

●事業の頻度	……………1年/1回
●参加人数	……………28名
●活動の費用、財源	……………102,345円 児福福祉施設機能強化交付金



- 子どもたちの個性や体力に合わせてボランティア一人ひとりに担当してもらっている。対応に困っている時は、職員が適切なアドバイスをするようにしている。
- 場所の選定は、事前に現地に出向き、安全確認をし、往復距離など、子どもたちの負担にならない所を選ぶようにしている。
- 事故等に備えての保険にも加入している。

事業実施の際の注意事項
遠足は、子どもたちの負担にならない場所を選定

施設紹介

四国と京阪神を結ぶ活気ある海上交通の町



当院のある小松島市は、徳島県の東部海岸部に位置し、面積45平方km、人口4万3千人の港湾都市です。屋島の合戦へ向かった源義経が四国に最初に上陸した地であることで有名です。古くから、紀伊水道に面した天然の良港を有し、四国と京阪神を結ぶ海上交通のまちとして繁栄してきました。近年は、本四連絡橋の開通で京阪神との定期航路が廃止を余儀なくされたものの、外国貿易の国際交流拠点港湾都市としての発展を目指しています。乳児院の所在地は赤十字病院、赤十字総合療育センター(身体障害児者入所施設)、県立養護学校からなる福祉、医療、教育、ゾーンを形成しており、そのため、県、市の行政のみならず、地域住民からも期待が寄せられています。

家族と共に生活できる幸せを子どもに提供する場所として

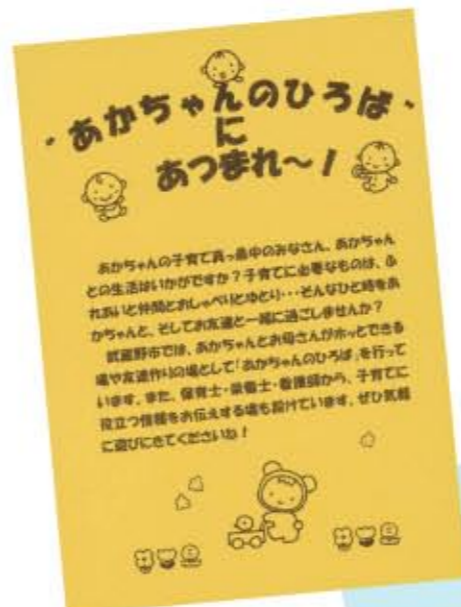


核家族化の進行とともに、育児の伝承が弱まって母親への負担が集中している傾向にあります。子育てに自信が持てず、時として大きなストレスを抱えている母親もいます。子どもも、子ども同士との交流の機会が少なく、社会性が育まれていない状況が見受けられます。乳児院に措置されてくる子どもは、乳児院に措置された親の病気や離婚、未婚、経済的理由などがあります。なかにはネグレクトといわれる乳幼児や虐待待児などの場合もあります。子どもにとって一番の幸せは、家族とともに生活することです。育児不安を抱えている保護者への支援や仕事などの関係で一時的に子ども世話ができない保護者への支援、保護者同士が気軽に集まって交流する機会の提供、子どもと向き合っ

事業実施までの経緯

「あかちゃんのひろば」にみんな集まれ!

市の地域子育て支援推進担当から、「平成17年度から0歳児を持つ家庭の地域支援を全地域対象に行いたいの協力をしたい」との依頼がありました。それまでも、お母さん方から育児の悩みを相談される度に「保育園でできることはないか」と話題にしていたので、積極的に受け入れることにしました。実施するに当たってスタッフは、主任1名と協力をお願いした武蔵野赤十字奉仕団



の方2名で、在園児の保育に支障をきたさないように、「あかちゃんのひろば」としてスタートさせました。参加された方々からアンケートなどでもいただき、希望に対しては極力応えるようにしながら、順調に会を重ねてきました。平成17年度は3〜5組の参加を得ましたが、18年度は初回から申し込み数が10組を超えるほどになっています。

事業の内容

保育園で子育ての応援します



6ヶ月〜1歳未満の赤ちゃんとその保護者(いままでは母子で参加)の方々に来ていただき、子育ての中の悩み、困っていることなどを話し合い、それぞれの経験談や解決法を話し合ってもらいます。

赤ちゃんにも保育園に慣れてもらいます。赤ちゃんが目の前のオモチャに手をのびたり、他の赤ちゃんへの興味で近づいたり、遊び出す様子を見守りながら、その月齢での自然な姿や特徴などを専門的な立場から具体的に参加者の方へお話しします。お母さん同士での情報の交換や打ち解けた談笑ができるように、輪の中に入れない参加者が出ないように、気を配りながら会を進めていきます。毎回ではありませんが、離乳食の試食をしていただき、月齢毎のメニュー・スプーン・食器などの説明をしています。「家ではなかなか食べてくれない」と悩むお母さんも試食していただき、「あつ、おいしい。市販されて



子どもたちの食事の様子や保育士の対応を、身近で見たい、年齢を追いながら子ども



もたちの成長していく姿の説明に耳を傾けていただいています。見学の間の保育は武蔵野赤十字奉仕団の協力をお願いしました。見学後にアンケート、保育園からのお知らせなどを配布して解散となります。

事業の効果、成果

好評につき市報などで申込者が増えました

平成17年度に実施した事業の参加者の中から、当園に3家庭が入園されました。平成18年度は、市の広報が出されると、申し込みの連絡が何件も入ります。参加された時に、次回への参加申し込みをされる方も多くあります。また、参加してみて「楽しかった」「参考になった」「参加してよかった」という声もアンケートに記入していただいています。参加を希望される方の中には、「他の子育て事業で日赤の「あかちゃんのひろば」のことを聞いたので…」という方もいて、日赤保育園での「あかちゃんのひろば」の活動が定着し、口コミで広がっている事を実感させられています。

事業を行う上で問題点、今後の課題

奉仕団との事前の打合せを充分に



17年度は同じ方に毎回来ていただいていたのですが、18年度は「色々な方が参加できるように」と奉仕団からの希望もあり、分団から2名、毎回違う方が来てくださっています。どんな内容で行うかは、その都度説明をさせていただいています。当日ではあわただしく、不十分になりがちです。「あかちゃん

のひろば」の終了後に奉仕団の方にお話を伺うと、「楽しかった」「子育てをしていた頃を思い出しました」などの感想をいただいています。また、「聞いていたのとちょっと違った」などの声もあり、事前に「あかちゃんのひろば」の主旨や内容、その他の事柄についての打合せをしっかりと行い、理解を得ることが課題といえます。

武蔵野市の保育園はあかちゃんの子育てを応援しています。保育園であそぼう!

保育園で子育てしている親子の方に安心して遊んでもらえるよう、11月15日事業を行います。育児を通しての友達作りや楽しい交流も応援しています。どうぞお気軽にご参加ください!

保育園の見学も同時に行いますので、ご希望の方は保育園に電話で予約してください。

公立保育園の住所・電話番号

園名	所在地	電話番号	園名	所在地	電話番号
中野	八幡町 1-4-13	51-6478	武蔵	武蔵町 5-1-1	32-2443
南	西陣町 3-6-15	48-1501	北	西陣町 1-23-17	24-6681
桜	桜町 2-1-27	52-4671	南	南町 2-25-17	32-8167
東	東 4-11-3	53-1783	西	西陣町 5-11-51	51-5206
北	西陣町 3-25-3	21-2405			

※ 予約の受付は市役所南校の10:00~16:00までにお電話ください。土日は受付しません。

★お家で遊びましょう★

園名	開催日	時間
中野	毎週水曜日 (11月17日開催予定)	10:00~12:30
武蔵	毎週木曜日 (11月22日開催予定)	9:30~15:00
南	毎月10日 (11月10日開催予定)	11:00~12:30
北	毎月7日 (11月7日開催予定)	10:00~12:00
桜	毎月11日 (11月11日開催予定)	9:45~15:00
東	毎月13日 (11月13日開催予定)	11:00~15:00
西	毎月15日 (11月15日開催予定)	9:00~15:00
武蔵	毎月17日 (11月17日開催予定)	9:30~12:30
南	毎月19日 (11月19日開催予定)	11:00~15:00
北	毎月21日 (11月21日開催予定)	11:00~15:00

事業実施のスケジュールと当日の流れ

お母さんとあかちゃんがホッとできる場所を企画

当日までの流れ

- 市の広報「コミュニケーションセンター」などのチラシを見た方が申し込み、連絡が入る
- 参加希望名簿に記入
- 10組とつながり始め切りとして、それ以後の申し込みは次回へお預りする
- 実施日の一週間前に参加家庭に確認の連絡をする
- 当日の参加者名簿(見やすく、ボスターのみつに、母子「誕生日」)を札(子どもが着用)など作成
- アンケートほか参加者記入用の用紙、筆記用具などを準備する

当日のタイムスケジュール

- 10:30 赤ちゃんの遊ぶ姿を見ながらの園からの専門的な話し
- 10:45 園内見学
- 11:05 アンケート記入、お知らせ配布
- 11:15 解散

- 9:00 保育園ホールに豊、サークル、赤ちゃん用おもちゃを準備参加者名簿を表示
- 9:45 武蔵野赤十字奉仕団との打合せ
- 9:50 参加者受付
- 10:00 「あかちゃんのひろば」開始自己紹介をしながら、悩みや園での対応などを話し合う



DATA

- 事業の頻度月/1回
- 参加人数10~20名
- 活動の費用、財源
子どもたみ枠付セット132,300円
半円テーブル119,900円
ソフトサークル89,250円
(本社児童福祉施設機能強化交付金)

事業実施の際の注意事項

あかちゃんの動きに十分配慮した、安全対策で臨む

●事業を実施する保育園のホールは、安全対策が十分取られています。万が一の事故を考慮、打合せ時に赤ちゃんがハイハイしていきそうな場所、つかまり立ちする場所など、念を入れて検討し、実施中も気配りを怠らないようにする。

●専用の仕切り板などを購入し安全面に対応。

施設紹介

地域と共に歩んだ保育園 子どもたちの笑顔は地域の笑顔

武蔵野赤十字保育園は、緑に包まれた住宅街の二画にあります。正門玄関の扉には二目で赤十字の建物と分かるマークが付いています。正門・裏門の前は、それぞれ地域の生活道路になっていて、園庭で遊ぶ子どもたちの姿に、地域の方が笑顔で立ち止まったり、犬の散歩の方が声をかけたりと、地域に溶け込んだ園の風景を見ることが出来ます。



吉祥寺という繁華街から徒歩10分という場所に在りながら、乳幼児が木の实を探したり、小山を駆け上がったリ、アスレチックができたりますような公園が数多くあります。春秋には幼児組の子どもたちが、徒歩で芋ほりにも行きます。都内からバスで来る保育園・幼稚園・小学校の子どもたちの遠足先である都立井の頭恩賜公園(文化園動物園)は、赤十字保育園の子どもたちの散歩先です。



子育てに役立つ情報を提供 気軽にしゃべりできる保育園事業を
いま子育て中のお母さんの多くは、近くに頼れる身内が無く、父親も仕事に忙しく子育てに参加する時間が無いというのが現状です。また、近所の同年齢の子どもを持つお母さんたちのグループにはなかなか入れず、ひとりでお母さんながら子育てをしているお母さんも多いのです。このようなお母さんは、産休・育休中の方が多く、インターネットや市の広報を利用して仕事復帰の為、保育園を探すことにも熱心です。

武蔵野赤十字保育園では、このような家庭で日々悩みながら子育てをしているお母さん方が、気軽に参加でき、子育てについて話せる場所を提供したいと思っています。

評価コメント

武蔵野市の保育園での子育て支援



武蔵野赤十字保育園におかれましては、以前より体験保育や育児講座などの地域子育て支援事業に取り組まれており、保育園に入所している家庭の支援のみならず、地域の子育て家庭を支えていただき感謝しております。

武蔵野市では0~2歳児の市民のうち保育園に入所しているのは2割程度で、他の児童は日中家庭で子育てされています。また、核家族が多いという都市型の特徴が見られ、その8割の家庭への子育て支援施策を拡充することは、市の大きな課題の一つです。

市では平成16年度に実施したアンケートの結果から、0歳児を子育て中の親は出かける範囲が狭いため孤立しやすく、子育てに不安を感じやすいなど、この時期特有の悩みがあることなどを認識し、「0歳児期の子育て支援事業」の拡充を行うこととしました。

そして、地域に点在し0歳児子育ての

武蔵野市保育課長 竹山 正裕

キルをも持っている保育園で0歳時期支援事業「あかちゃんのひろば」を実施することとしました。その際公立保育園だけでは市全体を網羅できないため、武蔵野赤十字保育園にもご協力をお願いしたところ、快く引き受けてくださり、公立保育園同様事業を実施していただくこととなりました。

平成17年度の「あかちゃんのひろば」の参加人数はのべ572組、同年の0歳人口は879人ですので、多くの親子が利用していることがわかります。これも武蔵野赤十字保育園をはじめ民間保育園の協力なくしては得られなかった結果と考えております。

これからの子育て支援事業は、公民問わず子育てに関わる様々な施設が手をつないでいくことが必要で、そのことにより支援のさらなる充実が望めると考えております。今後も武蔵野赤十字保育園の発展をお祈りいたしますとともに、本市子ども施策へのご協力を宜しく願っています。



DATA

社会福祉施設 武蔵野赤十字保育園

〒180-0006
東京都武蔵野市中町3-25-7
TEL : 0422-52-3298 FAX : 0422-54-4171

- 施設開設年月...昭和26年9月
- 定員.....178名
- 職員数.....31名(平成18年4月1日現在)

MAP



事業実施までの経緯

夏だけでなく、冬の園外体験として計画



職員配置や予算との兼ね合いもあり施設の子どもたちの外出経験はとも不足しています。お預かりしている子どもが2歳



から6歳ということもあり、他の養護施設と違い、外出には必ず職員が付き添わなくてはなりません。普通の家庭であれば普通に経験できることを、施設の子どもたちにも自立していくうえで、経験させる必要があります。また、豊かな生活を送るうえでも、重要な要素となります。夏における園外での生活体験は、毎年幼稚園の夏休みを利用して各居室毎にキャンプ行事を行っています。冬、園外での生活体験は、通常運営費の中では実施できません。もつと子どもたちの園外における生活体験の場を設ける必要があるとの職員の意見もあり、特に雪を見たこともない子どもたちも多いことから、雪を体験できる事業を企画しました。

事業の内容

毎年2月、スキー場でのそりや雪遊びで社会性を育てる



毎年、2月頃に二泊三日で、河口湖周辺の遊園地及びスキー場に行き、遊びを含めた雪の生活体験、宿泊施設における生活体験、遊戯施設を利用した遊戯体験を目的に実施しています。各行動単位は、居室毎に職員及び学生赤十字奉仕団の引率のもと、一日目は、9時頃発の電車で武蔵境駅を出発し富士急ハイランドに行き、昼食及び各種のアトラクションを楽しみました。富士急ハイランドでは、男の子にはトーマスランドが一番人気で、走るトーマス列車に乗って大はしゃぎでした。また、女の子は、リカちゃんランドのリカちゃんハウスコーナーで、かわいい台所やお風呂などを楽しく目に輝かせて見ていました。スキー場では子ども専用のゲレンデで、ボランティアのおにいさん、おねえさんと一緒に、そりやチ



事業の効果、成果

園外体験で生活に変化を

平成15年度から17年度の3年間事業を実施した結果、いずれの年度においても、参加した児童は、歓声を上げ大喜びで雪遊びを楽しむとともに、園とは違った環境の旅館での宿泊という貴重な体験をしました。当園では、園外における生活

体験を出来るだけ取り入れ生活に変化を持たせ豊かなものとなるよう努力していますが、未だ充分とは言えず、本事業のように雪の中で飛んだり転げ回ったりして自然と触れ合ったり、旅館に宿泊するような体験の機会を設けることが必要です。

事業を行う上で問題点、今後の課題

より多くの社会体験を子どもたちに与えたい

行き先を今後どうして行くか、社会経験が少ない子どもに、より多くの経験を提供することを目的に検討していく予定です。



連携の状況

活動の成功にはボランティアの協力が不可欠

本園では、夏まつり、餅つき大会など園全体で行う行事の運営、設営、各居室で出かける遊園地やキャンプ等の引率や、日々の子どもたちの遊び相手など多方面でボランティアの皆さんの協力を得て実施しております。どの行事もボランティアの協力が不可欠であります。

本事業には、東京都支部青年学生赤十字奉仕団協議会※約10名が参加しています。子どもたちの情緒安定のためにも、普段からボランティアとして活動してくれている奉仕団の方に引率をお願いしました。計画立案は、職員の行事担当者が行い、奉仕団員に行事内容及び注意事項等を説明しました。子どもたちの写真、携帯での撮影も不可であることを電車内でのマナー、人数の確認、確保の徹底などです。1泊2日の日程なので、普段の日帰りのボランティアより、密接に子どもたちと関わるといふこともあり、多少緊張している顔も

見受けられました。外での行事は、思いもかけぬ事故などの心配もありましたが、怪我人もなく無事に日程を終了することができました。後の報告では、職員とボランティアの役割分担がうまくでき、楽しかったとの感想が寄せられました。

※青年赤十字奉仕団とは

青年で組織される赤十字のボランティアグループです。社会人や学生で組織される「青年赤十字奉仕団」、大学などで組織される「学生赤十字奉仕団」、看護学生で組織される「看護学生赤十字奉仕団」の3区分があります。また、各奉仕団の連絡調整及び各団活動の向上のために「青年学生赤十字奉仕団協議会」があり、東京では、都内12大学及び東京都赤十字青年奉仕団が参加しています。お互い連携をとりながら時には、大学や団の枠を越えて一緒に活動しています。



事業実施のスケジュールと当日の流れ
宿泊施設などの居室単位での行動を計画

- 当日までの流れ**
- 11月 東京都支部 青年学生赤十字奉仕団協議会との行事計画検討
 - 12月 宿泊施設など手配
 - 2月 事業実施



当日のタイムスケジュール

2日目(貸切バスにて行動)		1日目	
7:00	起床 朝食	8:40	子供の家 出発
9:30	スキー場へ	9:10	武蔵境駅 乗車
10:00	スキー場着	11:57	富士急ハイランド駅着
14:30	現地出発	16:00	富士急ハイランド発
17:00	帰園	16:02	河口湖駅着
		16:20	レトロバスにて帰着

事業実施の際の注意事項
雪の中、迷子や怪我には特に気をつけて計画

子どもたちが、旅行や宿泊に不慣れなこと、ボランティアの助けをかりての引率であること、慣れない雪の中での遊びということ、迷子や怪我には、十分気をつけて計画している。

DATA

- 事業の頻度 1年/1回
- 参加人数 36名 (内 児童数19名)
- 活動の費用、財源 経費572,702円



施設紹介

自然が息づく武蔵野、武蔵野赤十字病院と同じ敷地内に赤十字子供の家



本施設は、本園と分園(グループホーム)からなり、いずれも副都心新宿から西方約15kmの武蔵野市にあります。武蔵野市の魅力は、「緑あふれる環境の良さ」です。市内には、大小合せて約150もの公園があり、街並みや住宅にもたくさん自然が息づいています。有名な井の頭公園には、終日多くの人々が憩いの場として利用しています。武蔵野市の人口は、13万3千人、6万8千世帯を数えます。本施設の本園は、中央線武蔵境駅から徒歩8分、武蔵野赤十字病院と同一敷地内、三鷹市と隣接しています。また、分園は、平成14年2月1日から開設して、本園とは、中央線を挟んで反対側にあり、本園から自転車約15分、武蔵野浄水場近くの分譲住宅の中にもあります。あたたかい近所の皆様に支えられて子どもたちにとってとても良い環境の中で生活することができています。

子育ての様々な相談業務を支援

武蔵野市では、平成16年2月1日に「武蔵野市児童虐待の防止及び子育て家庭への支援に関する条例(略称「子育てSOS支援条例」)を施行しました。子育てSOS支援条例は、父母など保護者、市、市民、子育てに関する事業者等に責務を規定し、それぞれが責務を果たすことにより、児童虐待の防止及び子育て家庭への支援を図り、もって、児童が心身ともに健やかに育成されることを目的としています。

その一環として、赤十字子供の家でも、平成16年2月から市の子育てSOS支援センターが行っている電話相談子どもやその家庭のごとの悩みや相談を平日17時から22時まで、土曜日8時30分から22時までを武蔵野市から委託され、当園の養護職員がローテーションを組み、様々な相談を受けています。内容は、「子育ての悩み」「子育てに関するサービス機関の紹介」「いじめにあっている小学生からの悩み相談」など各種内容の相談ですが、日頃の養護業務の経験を活かして的確な返答ができるよう努力しています。

評価コメント

子育て家庭を暖かく包むネットワーク「子供の家」



全国的に児童虐待事件の多発や子育てに何らかの困難性を持つ家庭が増加するなど、子育てにかかる問題は深刻化しています。武蔵野市においては、このような問題に取り組むため、平成16年2月に「武蔵野市児童虐待の防止及び子育て家庭への支援に関する条例」を制定し、中核機関として子育てSOS支援センターを設置しました。

センター開設にあたっては、市民からの相談を広く受ける体制整備が、大きな課題でした。日中精一杯子育てに奮闘した母親の「誰かに聞いてもらいたい」という切ない思いや近隣からの「子どもの泣き声と親の怒鳴り声が聞こえて心配である」という通報を適切に受け取り、支援のスタートを切るためには行政の機能だけでは困難であると判断し、武蔵野市内にある赤十字子供の家に、電話を転送するという形態で、日祭日、年末年始を除く平日18時半から22時までの夜間電話相談をお願いしました。その後、月曜か

武蔵野市子育てSOS支援センター長 吉川 良子

ら金曜は17時から22時まで、土曜日は8時半から22時までと委託時間を変更し、現在に至っていますが、事業開始から平成17年度末まで延べ150件の相談を受けていただきました。対応の流れとしては、毎朝夕の引き継ぎ時に情報交換を行い、更に年に2〜3回赤十字子供の家職員とセンター相談員による事例検討会を開催しています。児童養護施設として、子どもの発育から保護者への対応まで幅広い専門知識と実践が蓄積されており、特に匿名希望が多い夜間の相談者に対し、受容と傾聴を基本に対応していただけることから、事業開始当初より市は安心して事業をお願いできております。

平成17年4月児童福祉法改正に伴い、武蔵野市も要保護児童対策地域協議会を設置し赤十字子供の家においても加入して頂きました。大変、心強いことです。今後も地域の様々な事業者と連携して、子育て家庭を暖かく包みこむネットワークを拡げしていきたいと思っております。



DATA

社会福祉施設 赤十字子供の家

〒180-0023
 東京都武蔵野市界南町1-26-1
 TEL : 0422-31-8283 FAX : 0422-31-8957

- 施設開設年月...昭和25年4月
- 定員.....40名
- 職員数.....48名(平成18年4月1日現在)

MAP



事業実施のスケジュールと当日の流れ

当日までの流れ

- 2ヶ月前に電話連絡 期日・方法調整
- 文書発送
- センター長、学校長宛に 交流願い文書送付 ※学校の授業時間を使用している為
- 報道(新聞TV)するために、各児童保護者宛に報道、許可文書発送により確認

一緒にやるっ！交流は2ヶ月前の活動計画から始まる！

当日のタイムスケジュール

12:00 西高校スポーツ科館

12:30 両チームアップ開始

アナウンスは、センターの子どもが行います。また西高校からも2名出してもらい自車のチームを紹介してくれます。

開会式

試合(5回戦)

閉会式(授与式・交流会) ※お互いのチーム代表挨拶と顧問の先生から講評してもらいます。

記念写真

見送り

事業実施の際の注意事項

安全で品質のよい、道具へのこだわり。

●ボールは、本物の野球らしさを楽しめ、安全でスピードがないソフト1号を採用。

●グローブは、すぐ形が崩れてしまう安いものは避け、品質の良い物を使用。障害のある子はそれぞれ障害に特徴があるため良い道具が上達する補助となる。

●キャッチャーのマスク、プロテクター、レガーツは、動きやすいよう小中高と体に合わせて用意し、入念に安全をチェックして使用。

●防球ネット、ボール箱等安全ネットは必ず使用。

※車いす用に鉄工所で低い枠と車輪を着け移動可能にし、ネットは別に着ける。

DATA

- 事業の頻度1年/1回
- 参加人数60名
- 活動の費用、財源50,000円 (児童福祉施設機能強化交付金)



評価コメント

熱い感動本当にありがとう



第5回、はまなす医療療育センター対青森県立西高校スポーツ科との交流試合を観戦させていただきました。この試合のために両チームは猛練習をして備えたそうです。アナウンスはセンターの子どもさんと西高校の生徒さんが務め、審判は西高校硬式野球部員です。

この試合は、キャップハンディ特別ルールで行われ「キャップハンディ」は「ハンディキャップ」を逆にした造語だと聞きました。健常者が障害ある人たちの能力に合わせて互角の力でスポーツを楽しむというものです。

西高校チームは、走り不可、内野をノーバウンドで超えたらアウトです。男子は利き手使用不可の片手打ち、女子も打撃はスイツチのハンディがあります。試合中、車椅子の子がボールを投げ、追いかけて、バットを振りまわります。マヒのある子が不自由な足で「異ベイス」をめがけて走る姿は本当に生き生きとして眼が輝いているのです。

青森県立八戸第二養護学校 前校長 佐藤学

一方、西高校生の生徒さんは、キャップハンディルールの範囲で全力を尽くして試合に取り組んでいました。スポーツが得意で普段部活動の中心選手として活躍している生徒さんたちは、特別ルールで障害ある人の立場を肌で感じ悪戦苦闘しながら、障害ある子どもたちを見下すこともなく対等にスポーツマンシップを発揮している西高校生徒さんのマナーや思いやりに深く感じました。スポーツで戦う姿を通じて障害のある子どもさんに直に触れることでお互いの共通点や違いを認識し、本当にお互いを敬う心が生まれていると思われました。

センターの園長先生からも交流試合を通して、驚くほど症状が改善し、訓練や生活意欲が向上し、センター全体を明るく元気にしていると伺いました。今後、この障害ある子どもたちのキャップハンディルールが全国発信され多くの地域に普及し、障害ある子どもたちが自分の残された可能性に向き合い、人生目標を立てて自立に挑戦してほしいと心から願います。

施設紹介

美しい景勝地を持つ「海のまち八戸」

八戸市は、太平洋に臨む青森県の南東部に位置し、縄文遺跡の宝庫として知られ、また八戸南部藩の城下町として栄えた古い歴史があり、更に全国屈指の水産都市と北東北随一の工業都市といった二つの顔を併せ持つ、人口25万人を擁する地域の拠点です。

平成14年には東北新幹線が開通して東京と3時間で結ばれました。国立公園十和田湖、三陸海岸、八甲田山に近く、国の重要無形民族文化財である夏の日本一の山車「八戸三社大祭」、早春の「えんぶり」、うみねこが繁殖乱舞する天然記念物「燕島」、それに続く県立公園「種差海岸」は鳥瞰図の第一入者である吉田初太郎が景勝地と認めただ程です。海の幸もちろん山の幸も豊富で美味しい「海のまち八戸」です。



多様な障害に応じた自立支援、子育て支援が課題

現在当センターでは、肢体不自由児施設、(入園部42名/通園部40名)重症心身障害児施設(40名)、重症心身障害児(者)通園事業(B型)、短期入所事業を実施していますが、年齢、障害、能力が多様化する中での処遇力の強化、また、家庭における子育て機能低下とともに発達障害、虐待、情緒、行動に問題のある児童の利用に対応した生活適応、自立支援、子育て支援も大きな課題となっています。

また医療と福祉の改革が急速に進む中で、障害者自立支援法の本格実施に伴い(利用者)からはさらに高い療育サービスが求められており、職員一人ひとりのプロ意識、責務が問われています。



八戸三社大祭

DATA

社会福祉施設 青森県立はまなす医療療育センター

〒031-0833 青森県八戸市大字大久保字大塚17-729
TEL: 0178-31-5005 FAX: 0178-31-4144

- 施設開設年月...昭和36年9月
- 定員.....82名(肢体不自由児施設42名・重症心身障害児施設40名)(通園部40名)
- 職員数.....81名(平成18年4月1日現在)

MAP

青森県立はまなす医療療育センター

児童福祉施設の子育て支援事業について

日本赤十字広島看護大学教授 飯村 富子

コメント

児童福祉施設で行う子育て支援には、2つのパターンが見受けられました。1つは入所している子どもたちの健やかな成長・発達を願って、地域の人との交流を図る活動であり、もう1つは地域の母と子の子育てを支援するため、赤十字の施設や人材を提供する活動でした。いずれも「こうあつたらいいな」との職員や子ども、母親の願いを捉え、現場のスタッフが実現に向けて知恵を絞り、行政、社会福祉協議会、学校、ボランティアなど関係者の協力を得て、特色のある多様な活動を展開しています。

前者の活動には、秋田赤十字乳児院の里親研修会、徳島赤十字乳児院のふれあい遠足、赤十字

子供の家の雪体験旅行、青森県立はまなす医療療育センターの野球大会の活動が挙げられます。

里親研修会は、子どもとのふれあい体験、知識、交流とバランスのとれたプログラム構成に特徴があり、ふれあい遠足は、地域の親子やボランティアと2人1組の行動、社会福祉協議会との協働が注目されます。また、雪体験旅行は若い学生赤十字奉仕団員と宿泊し、部屋単位で行動することで交流を深め、医療療育センターの活動はマスコミへの情報提供、高校生や学校の協力、誰もが対等の立場で参加できるルールづくりが注目される点です。

後者の地域に開かれた子育て支援活動には、松本赤十字乳児

院の日本語教室、松江赤十字乳児院の食育、武蔵野赤十字保育園のあかちゃんのひろばが挙げられます。

日本語教室と食育は、いずれも保育士、看護師、栄養士など専門職や日本語ボランティア講師、赤十字奉仕団などチームでの取り組みが事業成功の鍵であり、市役所やスパーなど、官民の協力による仕組みづくりも見逃せません。また、あかちゃんのひろばは母親の悩み相談事業の評価を出発点として、赤十字奉仕団の協力、親同士の情報交換、専門家の助言、離乳食の試食など、施設の特長、人材を活用した運営が参考にした点でしょう。

